京都府北部の縄文時代遺跡

長谷川　　達

1. はじめに

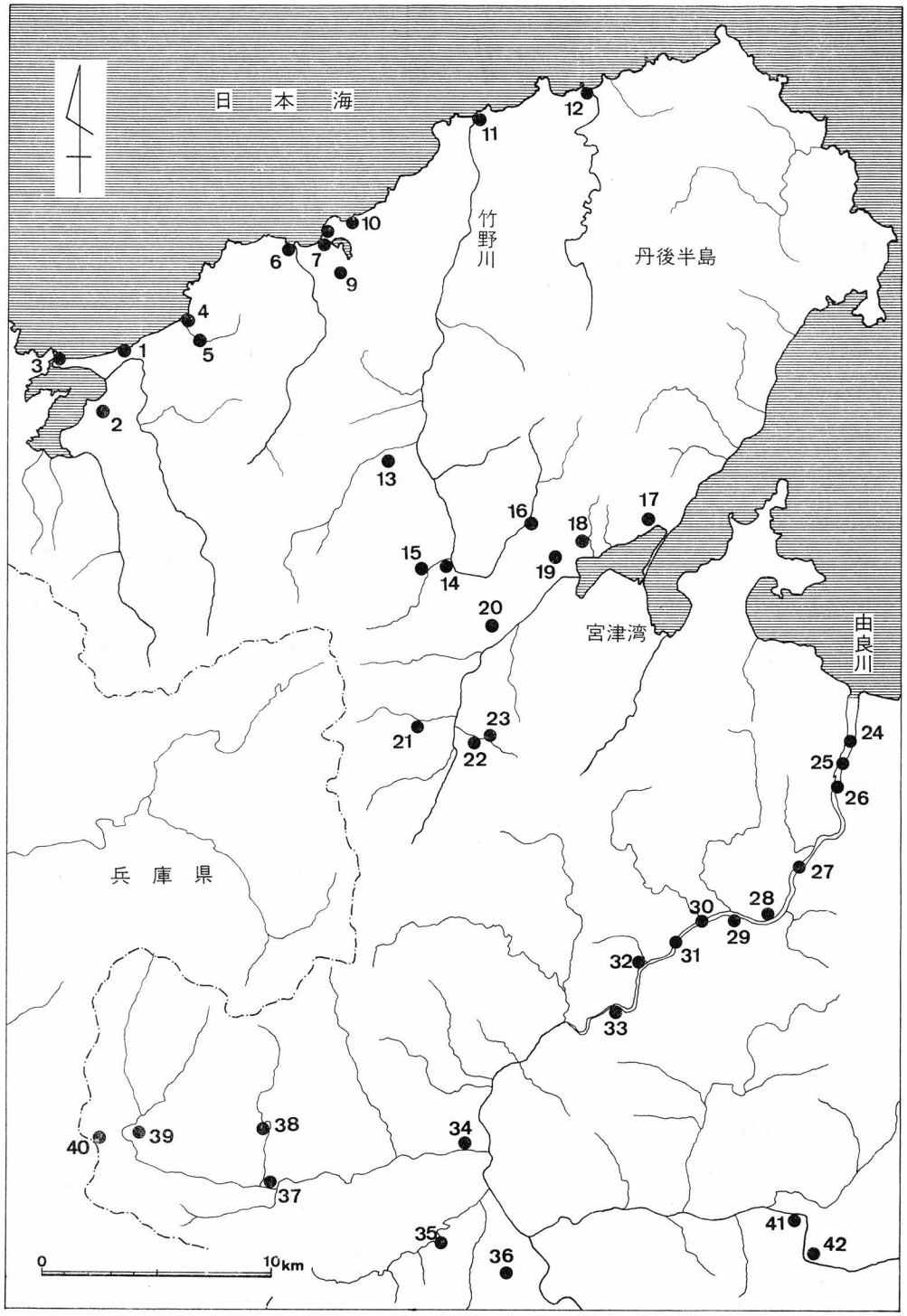
京都府北部において，縄文土器が初めて認識されたのは，大正９年の函石浜遺跡の報告である。それ以後，長い空白期間があるが，昭和20年代末から，30年代にかけて，主に丹後半島西部の海浜部で発掘調査，分布調査が続き，浜詰，宮ノ下，柳谷口，平などの遺跡が確認されていった。また，その頃，由良川下流域においても，河底から採取される砂利を丹念に観察することによって，河口から約20kmの間に，数珠つなぎともいえる状態で縄文土器の出土地点が発見された。この頃，前記の地域に限らず，遺跡の発見は，各地域に在住の個人の追求に負うところが大きく，昭和47年に発行された「京都府遺跡地図」(注1)では，別表の内の19か所が記載されている。遺跡地図発行の時期に前後する頃より，徐々に各種の土木工事に伴う集落跡の調査件数が増加するとともに，縄文土器の出土地点も増加し，現在では42か所を数えるに至っている。

かつては，比較的海浜部に集中するかのように見えた遺跡分布であったが，近年は海から離れた内陸部で増加し，立地条件についても大きく拡大する傾向にある。さらに今後も，種々の要因によって土地の改変される機会も多く，遺跡数も増え続けることが予想される。このような状況の中で，ここでは，現在まで確認されている京都府北部の縄文時代の遺跡を整理しておく意味で，その概観を述べてみたい。

なお，ここで取扱う京都府北部とは，旧国名で言う丹後地方と丹波地方の北部（由良川水系中流域まで）である。また，遺跡についても，付表，分布図では，１片であっても，縄文土器を出土した地点を抽出し，石器だけが出土している遺跡は加えていない。

2. 地形の概要

この地方の地形は，北側が海に面し，内陸部では，山地が面積の大部分を占め，広い平野部はない。海岸線は，丹後半島を中心として，東部が若狭湾の西端にあたり，いわゆるリアス式海岸となり，舞鶴湾，栗田湾，宮津湾などが形成され，凹凸の激しい地形になっている。半島部も含め東部では，山塊が急激に海に没する所が多く，海岸部の平野は極めて狭い。西側は山陰海岸の東端にあたり，海岸線の凹凸は比較的少なく，東部より砂丘の



第1図　　京都府北部縄文時代遺跡分布図

発達している部分が多い。内陸部は，丹後山地，丹波山地などに分けられるが，大きくは，中国山地につながるものであり，標高600～800mを頂とする山地が広がっている。その山地間を縫うように幾本かの河川が流れ，大小の沖積地を形成しつつ，日本海に注いでいる。代表的なものは由良川で，主に丹波地方をめぐり，一部に兵庫県からの支流も集め，府下最大の流域面積を持っている。中流域では比較的広い綾部・福知山盆地を貫流し，下流域では，狭隘な谷部を流れ，舞鶴・宮津市境で海に注ぐが，河口部に沖積平野はほとんど形成されていない。下流域の谷部では蛇行を繰り返し，各所に自然堤防を形づくっている。丹後半島の基部をめぐるように流れる竹野川は，半島部分では最も長く，大宮，峰山，弥栄町付近では，小平野が形成されるとともに河岸段丘が観察できる。洪積世河岸段丘は，主に由良川・竹野川流域で顕著である。由良川は上流部では長く深い段丘が続き峡谷の様相を呈しているが，ここで取り扱う地域では，綾部，福知山盆地周辺に多く，下流域ではほとんど認められない。竹野川の場合は中・下流域に残っている。段丘も大別して，高位，中位，下位の3面が見られるが，その後の浸食作用によって舌状の丘陵となっている場合が多い。低位段丘は場所によっては，段丘面に後世の堆積がさらに加わり，扇状地化したり，耕作等による土地の改変によって判然と区別することができない部分も多い。その他の河川は，全長数km程度のものではあるが，舞鶴市域で，志楽川，与保呂川，伊佐津川があり，宮津湾に流入するものとして大手川，野田川がある。丹後半島北端から西では，宇川，福田川や木津川，久美浜湾に流入する川に，佐濃谷川，川上谷川，久美谷川などがある。各河川の川口付近には海岸砂堆が形成され，宮津湾奥の阿蘇海，久美浜湾では，それぞれ天の橋立，小天橋と呼称される長大な砂嘴がのび，外海とを隔てている。また半島西部の一部には，海岸段丘があり，竹野川，福田川河口などにはかつて広い潟湖の存在したことが考えられている。(注2) また，この地域では，洪積世砂丘(古砂丘)を，その後の砂の移動によって新砂丘が厚く覆っている現象が見られる。

3. 遺跡概要

現在までに土器の検出できている遺跡は42か所であるが，大別する6期の中で，断続的ながらも複数以上の時期にわたる遺跡は17か所があげられる。各期を細別すると空白となる時期も多いが，特に長期間にわたる遺跡としては，平で前～晩期，裏陰で早～後期，大油子荒堀の早～晩期をはじめ，和江，八雲，志高，三河宮の下，武者ケ谷などがある。それぞれ，立地，出土状況，出土量等に大きな相違もあり，一様に把握し得ない側面も残すが，ここでは，各時期(注3)ごとに概要を述べる。

(1)　草創期

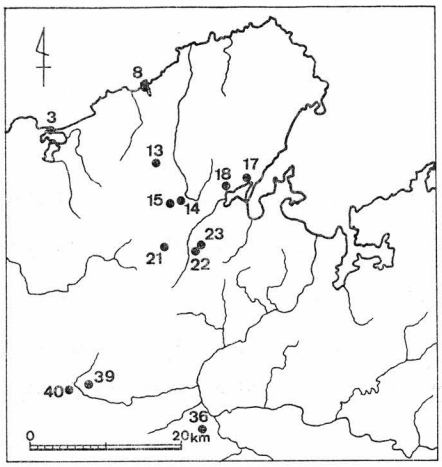
この時期の土器が発見されているのは，武者ケ谷遺跡，1か所である。報文によれば，土器は全体の約3分の2が遺存し，口径10.4cm，器高8.2cmを測る丸底の小形品である。口縁部に棒状の刺突文を上下2列に施したタガ状の隆帯をめぐらしている。これは，草創期の他の土器に類例は求め難いが，刺突文の様子から，押圧縄文系の段階と考えられている。

土器については，この1か所であるが，旧石器時代から，草創期の時期と考えられる石器は各地から出土している。有舌尖頭器が，久美浜町，峰山町途中ケ丘(注4)，舞鶴市小橋(注5)，綾部市西原(注6)，福知山市奥野部の各遺跡から，合計7点出土し，他にナイフ型石器，彫刻刀型石器，円盤状石器，削器などがあるが出土地点は主に綾部市(文献23)，福知山市域である。

また，夜久野町茶堂遺跡(文献33)出土の石斧は，草創期に属する片刃石斧と考えられている。

(2)　早　期

早期の土器を出土している遺跡は13か所あり，各期を通して，遺跡数は比較的多いが，遺物量は極めて少ない。湊宮(注7)を除いた12遺跡で押型文が出土しているが，途中ケ丘，中野，中上司，菖蒲池，大油子荒堀では1片だけが出土しているに過ぎない。裏陰，宮ノ下，嗎岡，有熊では，器壁が厚く，大粒の楕円文の施された高山寺系統のものが出土し，裏陰，有熊等の土器内面には幅の広い斜行沈線が認められる。また途中ケ丘出土のものは，楕円の粒も小さく，器壁の薄い焼成良好な土器で，内面の斜行沈線も細く明瞭である。山型押型文を出土しているのは，宮ノ下，有熊，中上司，大油子荒堀，千原(注8)の5遺跡であり，楕円文以上に量が少ない。有熊では，山の間隔が狭いもの，広いものと両方あり，後者は内外面ともに施文されている。それらを，ともに出土している楕円文を持つ土器と比べると，はるかに器壁が薄く，焼成，胎土ともに相違している。中上司の山形文は，山が鈍角となり，山形というよりは波状を呈している。大油子荒堀は，間隔の狭い山形文で小片ではあるが，口縁に対して水平に内外面とも施文され，原体を少なくとも2回はめぐらしていることがわかる。



第2図　草創期，早期遺跡分布図

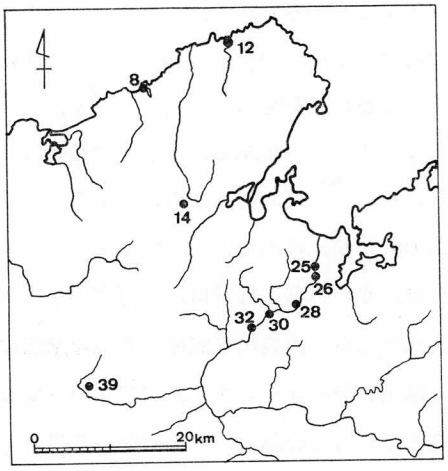
押型文以外の早期の土器が出土している遺跡は少ないが，宮ノ下，裏陰の両遺跡では，押型文よりも，条痕文土器，内外面に縄文の施された土器（表裏縄文），の一群が主体とな

っている。この表裏縄文土器は，かつて，宮ノ下Ⅱ式として報告され，島根県菱根遺跡等との対比から，日本海側を中心に分布する早期末～前期初頭に位置付けられていたものであるが，その後の検討，資料の増加によって早期の範疇に入るものと考えられている。しかし，早期の押型文以降，どの段階であるかは，明確には定まっていない。裏陰ではこれらの土器のほかに，貝殻腹縁圧痕文を施した土器や乳房状，丸底等の土器底部が数点出土している。この時期の遺構は皆無であり，伴出石器についても，石鏃，不定形の掻器，特殊磨石(注9)などがあるが，その出土状況から，他の時期の石器類と分離できない遺跡も多い。

このように早期の中で，押型文の時期は点々とではあるが，京都府北部全体から検出されている。しかし，その時期でも各遺跡数点の出土に留まり，さらに細分できるだけの資料は集まっていない。また，押型文の中でも古式に属する神宮寺，大川の時期はなく，押型文以降に至っては，宮ノ下・裏陰の条痕文，表裏縄文土器以外は，極めて資料が希薄になっている。押型文土器の分布についても，あえて，集中する小地域を限るとすれば，野田川水系周辺，夜久野町周辺，などをあげることができるが，狭い地域，少量の遺物での表層的な現象であり，現時点で特に限定できる要素に乏しい。

(3) 前　期

9遺跡で出土している中で，前期だけの単純遺跡はないが，宮ノ下，平，志高では層位的に独立している。宮ノ下では早期の土器を出土する層のやや上層で，羽状縄文を持つ土器が少量出土している。裏陰では早期の土器と混在する形で出土し，3字状，D字状の爪形文羽状縄文，条痕文土器があり，ほぼ前期前葉の時期に限られている。平では，後葉の北白川下層Ⅲ式，大歳山式が出土している。由良川流域では，和江，八雲，志高，地頭，三河宮の下があり，その支流牧川の上流に大油子荒堀遺跡がある。時期は，遺跡によって密度の濃淡はあるが，羽島下層Ⅱ式以後，前期全般にわたって出土している。この時期から晩期までの遺物が出土している，これら由良川下流域の縄文遺跡は，時期を別にすると，河口から約20kmの間に，現在10か所確認されており，時代の枠を取り去るとさらに増加する。これらの遺跡の多くは，当初，由良川川底からの砂利採取の際，引き上げられた土砂の中に古い時代の遺物が混入していることが発見されたことに始まる。それ以来，砂利採取地を丹念に観察することによって現在の



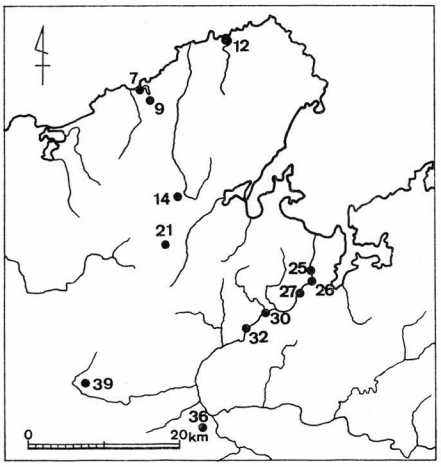
第3図　前期遺跡分布図

遺跡数となっている。発見当時は，川底から遺物が出土する状況から，水位上昇に伴って水没した川底遺跡，水上住居等も含めて，いろいろな想定が行われたが，1973年に行われた桑飼下遺跡の発掘調査によって，その多くが自然堤防上に立地していることが類推できるに至った。しかし，三河宮ノ下は低い段丘上に立地しており，立地状況が必ずしも一様でないことを示している。桑飼下遺跡の調査契機となった由良川の改修工事は，川が蛇行している部分を削り流路の安定を計るものであり，結果として，遺跡の立地する自然堤防部分が掘削されることになる。

志高の前期包含層も，その工事断面で発見され，弥生時代遺構面から，約2mの無遺物層を挟んだ下位にあるため，前期の資料が独立して得られることとなった。時期としては羽島下層Ⅱ式から北白川下層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式と前期をほぼ網羅しているが，その細分については，まだ層位的には把握されていない。伴出遺物には，石鏃，磨製石斧，石錘，磨石，石皿などの石器類がある。遺物は磨滅しておらず，ほぼこの位置が生活面であったと考えられるが，包含層の下位では，現在の川の水面から1mに満たない高さであり，現在，度々起こる由良川の増水状況から見ると，極めて不安定な立地であると言わねばならない。

(4)　中　期

この時期の遺跡は，半島北部の海岸部に3か所，竹野川・野田川水系に各1か所，由良川下流域に5か所，その中流部および，支流である牧川上流部に各1か所の合計12か所を数える。由良川下流域を除くと，前期同様に，その分布密度は低い。中期が中心となる遺跡には，柳谷口，新樋越川，有熊があり，そのほかでは，浜詰，和江，八雲，三日市，地頭，三河宮の下，大油子荒堀などから出土している。これらの遺跡の中で前葉に属するものとしては，三日市の鷹島式，平，有熊，新樋越川の船元式などがあり，平，八雲，三河宮の下などに里木Ⅱ式が出土している。中期末の時期として，平遺跡の調査によって注目された平ⅢC式(平式)が分布している。これは近年，中期末の編年整理によって設定された北白川C式(注10)の範疇に入るものである。この時期のものが比較的まとまって出土している遺跡は，平，裏陰，柳谷口，三河宮の下であり，ほかにも，由良川下流域，北部海岸部など，幅広い分布が見られる。三河宮の下で検出されている住居跡は，埋土内からの出土遺物が少なく，断定しきれない面も残すが，こ



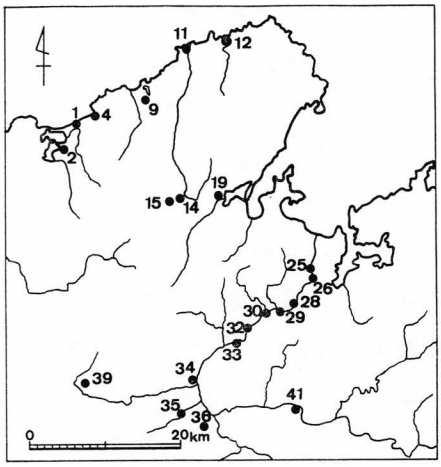
第4図　中期遺跡分布図

の時期のものと考えられている。

(5) 後　期

京都府北部では，この時期の遺跡が最も多く確認されている。昭和32年に調査された浜詰遺跡では，石囲炉を持つ中津式期の竪穴住居跡が検出されるとともに，数か所に貝層の広がりが認められ，日本海側では数少ない貝塚の１つであることが判明した。この遺跡は，木津川川口の海岸砂堆上に立地する遺跡で，土器類の他，石器類，自然遺物の出土量も豊富である。ここでは出土した土器から，中津式，福田ＫⅡ式並行のものとして，浜詰ＫⅠ・ＫⅡ式が設定された。その後も後期の遺跡は増加し，現在20か所を数えるに至っている。初頭の中津式を出す遺跡には，浜詰をはじめとして，平，裏陰，和江，八雲，桑飼下，半田などがあるが，まとまった資料を出土しているのは浜詰である。これに後続する福田ＫⅡ式は，浜詰，裏陰，八雲，桑飼下，武者ケ谷などに認められるが，中津式に比べ，遺跡数遺物量ともに少ない。

前期の項で立地について触れた桑飼下遺跡は，由良川下流域の遺跡立地を解明するとともに，遺物の種類，量ともにこの地方では群を抜いている。その土器類から，津雲Ａ，北白川上層式並行期として，それを包括する形の「桑飼下式」が提唱された。遺構には，本来竪穴住居跡に伴ったものと考えられる48基の炉跡や，埋甕がある。土器以外の遺物も豊富で，751本におよぶ打製石斧をはじめ，磨石，敲石，石皿，石錘などの石器類や，石製品，土製品，動・植物遺体などが出土している。報文では，これらの資料をもとに，その経済基盤を分析し，東北日本からの影響下に成立したものとして，「桑飼下型経済類型」と命名されている。土器の中には，加曽利ＢⅠ式，鐘ケ崎式など遠方のものも加わり，後期中葉の代表的な遺跡となっている。



第５図　後期遺跡分布図

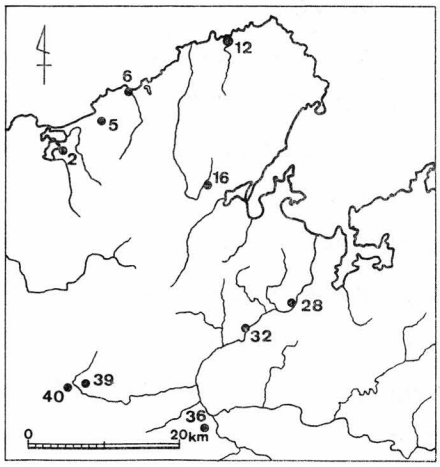
この時期の遺物を出土したほかの遺跡には，柳谷口，和江，八雲，半田などがある。後期後葉では，元住吉Ⅰ式が浦明で，同Ⅱ式が，浦明・平で，宮滝式が浦明，平，三河宮の下などで出土しているが，いずれも極めて断片的な資料である。また，函石浜，青野，高川原からも磨消縄文を持った土器片が各１片ずつ出土し，後期に属すると考えられる。函石浜の土器は，大正14年の報告書作成当時，すでに失われ，報告の中ではスケッチが掲載されているに留まる。青野は，丹波山地の狭い

谷部を貫流してきた由良川が，綾部の盆地に入り，流れの方向を北から西へ急激に変える部分の自然堤防上に立地する遺跡である。この付近では，現在までのところ，土器の出土は極めて微量だが，桑飼下で注目されたものと同様な打製石斧が点々と出土している地域である。このような遺跡は，由良川水系において顕著である。縄文土器を出土していない遺跡が多く，その帰属時期については不明瞭な点が多く，点数の多少もあるが，出土地を列挙すると，桑飼下以下，志高，三河宮の下，高川原，大油子荒堀，稚児野，半田，武者ケ谷，上野平，青野，味方など濃密な分布を示している。しかし，この状況は，現在までのところ，由良川水系中・下流域とその支流の範囲に限られている。

(6)　晩　期

ここで晩期として取りあげた土器の大半は，滋賀里Ⅳ式から長原式にかけての，いわゆる刻目凸帯文土器であるが，その細分は行われていない。草創期以降の多くの時期と同様に，別の時代を主眼とする調査の際，付随的に検出されたものが多く，出土遺物量は各遺跡数片に留まっている。その中で，比較的まとまった資料が得られているのは，久美浜湾を見降ろす海岸段丘上に立地する浦明遺跡である。1971年から72年にかけて，地表面および，土取工事断面を対象とした調査によって700余片の縄文土器が得られている。一部に後期の土器も含むが，大部分は晩期に属し，出土している深鉢，浅鉢から，黒色ＢⅠ・Ⅱ式，原下層式，五貫森式，滋賀里式等と対比され，主体は晩期中葉～後葉に位置づけられている。

夜久野町の菖蒲池遺跡は，標高143mを測る通称夜久野ケ原と呼ばれる溶岩台地の一画に立地し，1972年の発掘調査によって刻目突帯文の時期の竪穴住居跡が3基検出された。3基の内，ほぼ全容のわかる1基は不整形な円形を呈し，径約3mを測る。この遺跡は，住居跡3基という調査事例に加え，溶岩台地という立地も，ほかの遺跡とやや様相を異にしている。なお，ほぼ同時期の遺物を出土している大油子荒堀遺跡が，牧川を挟んだ対岸の丘陵裾の沖積地に立地している。



第6図　晩期遺跡分布図

縄文時代から弥生時代の接点であるこの時期，弥生時代前期の遺物がともに出土している遺跡には，浦明，松ケ崎，平，武者ケ谷，志高がある。また別表の中の，竹野，途中ケ丘も，この地方の弥生前期の代表遺跡であるとともに，前記の遺跡と共通する立地条件を

持っている。

4. おわりに

縄文時代の各遺跡について，時期を追って，その概観を羅列的に述べてきたが，遺跡数が増加しているにもかかわらず，各遺跡の詳細は不明な部分が多い。近年発見された縄文土器の出土地点を見ると，立地条件の多様化は，この地方でも一時期前に考えられていた縄文時代の遺跡立地に関する観点を大きく変えはじめている。立地の上で大別すると，浜詰・宮ノ下・平のような海岸部の砂堆上や，武者ケ谷・嗚岡などの洪積世丘陵上，あるいは由良川下流域における自然堤防のほか，半田などの川谷平野中央の微高地，裏陰・中野・千原等に見られる丘陵裾の扇状地または傾斜地をあげることができる。新たに発見されてきた遺跡の多くは，いわゆる沖積地(平地)の遺跡であるため，後世の土砂の堆積が厚いことに加え，水田化されている場合が多く，純粋に地表観察によって発見された遺跡は極めて少ない。志高の縄文前期の包含層が地表下約４m，桑飼下で約２mあり，湊宮が橋脚工事の際，地表下３～４mで発見された例もあるように，遺物が自然に地表に現われる可能性は低く，遺跡の発見，さらには遺跡の全容を掌握することが極めて困難になっているのが現状である。この傾向は，ここで取り上げた京都府北部という一地域に限られたものではなく，西日本全体の趨勢として把握できることは，すでに指摘され(注12)，自然環境の面からも，西日本に縄文時代の遺跡が東日本と比較して余りにも少ないという状況に対して疑問が持たれている(注13)が，この地域の様相にも，その疑問を肯定する要素が増加している。

この地域における縄文時代の遺跡が各時期ともに徐々に増加している点について述べてきたが，草創期以降，細別すると全く空白ともいえる時期，地域があり，また極めて断片的な期間も多い。このような状況の中で，この地域の縄文時代の様相を復元するまでには到底至っておらず，各遺跡の再検討を含め，今後に多くの課題を残している。

（長谷川達＝京都府教育庁文化財保護課技師）

縄文土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時期					関係河川	立地	文献，註記
			草創期早期	前期	中期	後期	晩期			
1	函石浜	久美浜町				○		海，佐濃谷川	海岸砂堆	1，20
2	浦明	〃				○	○	海(久美浜湾)	海岸段丘	15
3	(湊宮)	〃	○					海(久美浜湾)	海岸砂堆	
4	浜詰	網野町			○	○		海，木津川	海岸砂堆	3，4，10
5	松ケ崎	〃					○	海，木津川	平地	12
6	浅茂川	〃					○	海，福田川	海岸砂堆	注1
7	新樋越川	〃			○			海(離湖)	海岸砂堆	注1
8	宮ノ下	〃	○	○				海(離湖)	海岸砂堆	2，8，10，39
9	柳谷口	〃			○	○		海(離湖)	丘陵端(扇状地)	5，41
10	琴引浜	〃						海	海岸砂堆	
11	竹野	丹後町				○		海，竹野川	海岸砂堆	37
12	平	〃		○	○	○	○	海，宇川	海岸砂堆	7，9，11
13	途中ケ丘	峰山町	○					竹野川，鱒留川	河岸段丘	21，25
14	裏陰	大宮町	○	○	○	○		竹野川，常吉川	丘陵端，扇状地	26，35
15	正垣	〃	○			○		竹野川，常吉川	丘陵端，扇状地	
16	森本	〃					○	竹野川	丘陵端	35
17	中野	宮津市	○					海(阿蘇海)	扇状地	28
18	千原	岩滝町	○					海(阿蘇海)	扇状地	
19	定山	〃				○		海(阿蘇海)，野田川	丘陵裾沖積地	29
20	(水戸谷)	野田川町						野田川	扇状地	注14
21	有熊	加悦町	○		○			野田川，加悦奥川	丘陵上	30
22	嗎岡	〃	○					野田川，温江川	河岸段丘	31
23	中上司	〃	○					野田川，温江川	扇状地	27
24	城島	舞鶴市						由良川	自然堤防(河底)	13
25	和江	〃		○	○	○		由良川	自然堤防(河底)	13，16
26	八雲	〃		○	○	○		由良川	自然堤防(河底)	6，13
27	三日市	〃			○			由良川	自然堤防(河底)	13
28	志高	〃		○		○	○	由良川，久田美川	自然堤防	38
29	桑飼下	〃				○		由良川，岡田川	自然堤防	14，17
30	地頭	〃		○	○	○		由良川，桧川	自然堤防(河底)	14

番号	遺跡名	所在地	時期					関係河川	立地	文献，註記
			草創期 早期	前期	中期	後期	晩期			
31	高津江	舞鶴市							自然堤防(河底)	
32	三河宮の下	大江町		○	○	○	○	由良川，三河川	河岸段丘	14，32，34
33	高川原	〃				○		由良川	自然堤防	18
34	石本	福知山市				○		由良川，牧川	平地	19
35	半田	〃				○		由良川，和久川	平地	40
36	武者ケ谷	〃	○			○	○	由良川，土師川	河岸段丘	24
37	稚児野	夜久野町						牧川	丘陵上	33
38	天王	〃						牧川	丘陵裾	33
39	大油子荒堀	〃	○	○	○	○	○	牧川，大油子川	丘陵裾，沖積地	33，36
40	菖蒲池	〃	○				○	牧川	(溶岩)台地	22
41	青野	綾部市				○		由良川	自然堤防	23
42	味方	〃						由良川	河岸段丘	

文　　献

大正9年（1920）

1　梅原末治「湊村函石浜石器時代ノ遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊　京都府

昭和32年（1957）

2　岡田茂弘「京都府宮ノ下遺跡出土の土器」『貝塚』第70号

昭和33年（1958）

3　岡田茂弘「浜詰遺跡発掘概報」　網野町教育委員会・同志社大学考古学研究室

昭和34年（1959）

4　岡田茂弘「京都府浜詰遺跡発見の竪穴住居跡」『先史学研究１』　同志社大学先史学研究会

昭和36年（1961）

5　島田鴨行「京都府網野町柳谷出土の縄文式土器」『史想11』　紫郊史学会

昭和37年（1962）

6　小江慶雄「舞鶴市八雲地先由良川河底出土の先史遺物について」『京都学芸大学紀要』A-21

昭和38年（1963）

7　石附喜美男「奥丹後半島平遺跡の予備調査」（『古代文化』第10巻２号）古代学協会

8　酒詰仲男「京都府竹野郡宮ノ下遺跡　城山遺跡」『日本考古学年報６』　日本考古学協会

昭和39年（1964）

9　原　博「平縄文遺跡について」（『同志社考古』３・４合併号）同志社大学考古学研究会

昭和40年（1965）

10　岡田茂弘「縄文文化の発展と地域性――近畿」『日本の考古学Ⅱ』　河出書房

昭和41年（1966）

11　堅田　直「平遺跡調査概要」『帝塚山大学考古学シリーズ１』　帝塚山大学考古学研究室

昭和43年（1968）

12　釋　龍雄，林　和廣「京都府網野町松ケ崎遺跡調査報告」(『史想』第14号）　京都教育大学考古学研究会

昭和44年（1969）

13　杉本嘉美「由良川より採取した古代文化遺物について」(『両丹地方史』第10号）　両丹地方史研究者協議会

昭和46年（1971）

14　天野末喜，神尾恵一「京都府由良川流域における縄文文化」(『同志社考古』８）　同志社大学考古学研究会

昭和48年（1973）

15　天野末喜，尾崎正男，神尾恵一，広瀬和雄「浦明遺跡調査報告書Ｉ」(『関考連考古学資料集』第１輯）　関西考古学研究者連合

昭和50年（1975）

16　杉本嘉美「由良川より採取した古代文化遺物について」(『舞鶴地方史研究』第19・20合併号）　舞鶴地方史研究会

17　渡辺　誠「京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書」　舞鶴市教育委員会

18　中谷雅治「高川原遺跡発掘調査報告書」　大江町教育委員会

19　平良泰久，奥村清一郎「半田遺跡発掘調査報告書」　福知山市教育委員会

20　久美浜町誌編纂委員会「久美浜町誌――先史・古代」　久美浜町

昭和51年（1976）

21　京都府教育委員会「国道178号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1976）

22　京都府立丹後郷土資料館編「丹波　夜久野の文化財」

23　中村孝行「旧石器と縄文時代の遺跡・遺物」(『綾部市史』上巻）　綾部市

昭和52年（1977）

24　渡辺　誠，鈴木忠司編「武者ケ谷遺跡発掘調査報告書」　福知山市教育委員会

25　杉原和雄「遺物――縄文・古墳・歴史時代の遺物」『途中ケ丘遺跡発掘調査報告書』　峰山町教育委員会

昭和54年（1979）

26　杉原和雄編「裏陰遺跡発掘調査概報」　大宮町教育委員会

27　杉原和雄「中上司遺跡発掘調査報告書」　加悦町教育委員会

昭和55年（1980）

28　斉藤武雄，杉原和雄，中嶋利雄「中野遺跡第１次発掘調査概要」　宮津市教育委員会

29　京都府立丹後郷土資料館編「丹後郷土資料館収蔵資料目録　第１集」

昭和56年（1981）

30　長谷川達「有熊遺跡の出土遺物」(『京都府埋蔵文化財情報』第２号）（財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

31　浪江庸二，金村允人，佐藤晃一「後野円山古墳群発掘調査報告書」　加悦町教育委員会

32　竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-2）　京都府教育委員会

33　夜久野町教育委員会「京都・夜久野の文化財」

昭和57年（1982）

34　竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第２冊）（財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

35　大宮町史編纂委員会編「大宮町誌」 大宮町
36　伊野近富「稚児野遺跡発掘調査概報」（『京都府遺跡調査概報』 第２冊）（財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
昭和58年（1983）
37　平良泰久編「竹野遺跡」 丹後町教育委員会
38　吉岡博之「志高遺跡一昭和57年度カキ安地区の調査」 舞鶴市教育委員会
昭和59年（1984）
39　伊藤今日子「宮ノ下遺跡出土の土器」（『京都考古』第35号） 京都考古刊行会
40　辻本和美「福知山市石本遺跡の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第14号）（財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
昭和60年（1985）
41　玉田芳英「縄文時代中期末～後期初頭の土器について」（『片吹遺跡』） 竜野市教育委員会

注１　京都府教育委員会「京都府遺跡地図」 1972
注２　三浦　到「丹後の古墳と古代の港」(『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ） 同志社大学考古学シリーズ刊行会　1982
注３　ここで用いる土器の型式名は，各報告の中で使われているものを踏襲し，近畿・中国地方などの型式名があり，必ずしも一貫性を持っていない。
注４　坪倉利正・釋　龍雄「京都府奥丹後地方発見の有舌尖頭器」（『古代文化』第24巻第９号）(財)古代学協会　1972
注５　片岡　肇「舞鶴市小橋川川床発見の有舌尖頭器」(『古代文化』第24巻第９号）（財)古代学協会　1972
注６　中村孝行「綾部市西原町出土の有舌尖頭器」（『両丹地方史』第29号）両丹地方史研究者協議会・京都府立丹後郷土資料館　1979
注７　京都府立丹後郷土資料館収蔵資料による。
注８　岩滝町教育委員会　羽渕賢良氏の御教示による。
注９　小林康男「縄文時代の磨石」『中部高地の考古学』長野県考古学会　1978
注10　泉　拓良「西日本縄文土器再考――近畿地方縄文中期後半を中心に」『考古学論考小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社　1982
注11　堤圭三郎・金村允人・増田信武・照岡正己・小室義光・近藤義行・吉野義照「上野平遺跡発掘調査報告書」 京都府教育委員会　1973
注12　渡辺　誠「近畿縄文時代の遺跡と遺物(5)一低地の縄文遺跡」（『古代文化』第30巻第２号）(財)古代学協会
渡辺　誠「桂見遺跡をめぐる諸問題」『桂見遺跡発掘調査報告書』鳥取市教育委員会　1978
泉　拓良「縄文集落の地域的特質一近畿地方の事例研究」『講座考古地理学４一村落と開発』
注13　西田正規「縄文時代の環境」『岩波講座　日本考古学２一人間と環境』 岩波書店　1985
注14　野田川町教育委員会　後藤公一氏，加悦町教育委員会　佐藤晃一氏の御教示による。